

〈史料紹介〉

# 近世初頭の狩猟書における写本と版本の融合

——トリノ国立文書館所蔵史料 J.a.IX.4の場合——

頼 順 子

## はじめに

本稿で紹介する史料は、イタリア・トリノ国立文書館所蔵の狩猟書 J.a.IX.4である<sup>1)</sup>。本史料は、アンリ・ド・フェリエール『モデュス王とラティオ王妃の書』の写本 J.B.II.18（14世紀末成立）をはじめとする、サヴォワ家旧蔵の中・近世のフランス語の狩猟書群の一角をなしている。16世紀のものと推定される仔牛革装の背表紙には、*Art de fauconnerie*（『鷹狩り術』）と記され、ギヨーム・タルディフ『鷹狩り術と獵犬の書』（1492/93成立）の古版本および、アルトゥルシュ・ド・アラゴーナ『鷹狩り』（1443成立）と鷹の治療・維持管理等の情報の断篇を収めた写本が合本されている。

フランスでは、14世紀中葉から15世紀末にかけて、王家や王族・その他大諸侯の宮廷を核として俗語（フランス語）の狩猟書が成立し<sup>2)</sup>、最初は写本、後にその一部が版本の形態を取って、17世紀初めまで受容・再生産されていた。

- 
- 1) 筆者は、中世後期から近世初頭の西アルプス南北の婚姻・外交関係による移動・文化移転に伴うエリート文化共有集団の変化を、狩猟アイテム（書物・動物）の移動や交換から検討することを目的に、2019年2月にトリノ国立文書館で史料の予備調査を行い、本史料もその対象となつた。以下、本稿では冊子全体をトリノ本、写本部分をトリノ写本と略記。
  - 2) 西欧では、中世初期から狩猟は国王大権と結びついた特権であったが、フランスでは、初期ヴァロワ朝の14世紀末から15世紀初頭にかけて発布された一連の王令によって、王権による身分にもとづいた狩猟統制が行われるようになり、狩猟は貴族身分の微証となつていった。とりわけ、獵犬を用いて騎馬でシカやイノシシなどの猛禽類を使って行う鷹狩り『fauconnerie』／『chasse à courre』と呼ばれる狩猟と、タカやハヤブサなどの猛禽類を使って行う鷹狩り『fauconnerie』／『chasse au vol』は高貴な狩猟と見なされ、王侯貴族の間で盛んに行われた。こうした貴族的な狩猟文化が、当時の貴族的な書物文化（さまざまな知識や技術を俗語で記した豪華彩色写本の制作や蒐集）と結びつき、数多くの狩猟書が登場した。西欧中世の狩猟書の歴史や研究動向については以下の著作が詳しい。SMETS, A. et B. VAN DEN ABEELE（以下VDAと略記）、*La Littérature cynégétique*, Brepols, 1996 (*Typologie des sources du Moyen Âge occidental*, fasc. 75) ; ead., «Manuscrits et traités de chasse français du Moyen Âge. Recensement et perspectives de recherche», *Romania*, 116, 1998, p. 318 (以下 «Manuscrits et traités de chasse français du Moyen Âge»と略記) ; VDA, «Medieval Latin and vernacular treatises on falconry (11th-16th c.) : tradition, contents, and historical interest», *Raptor and human : falconry and bird symbolism throughout the millennia on a global scale ; publication in considerable extension of the workshop at the Centre for Baltic and Scandinavian Archaeology (ZBSA) in Schleswig, March 5th to 7th 2014* (Vol. 1-4), Wachholtz Verlag, 2018, p. 1271-1289. また、書物文化との融合については、頼順子「中世後期の狩猟と狩猟術の書」博士論文、大阪大学、2010年（未刊行。以下頼、2010と略記）および、同著「なぜ狩猟術の写本を所持するのか——中世後期～近世初頭フランスの三つの「私の」狩猟書」『待兼山論叢』第52号、2018年、57-59頁参照（以下頼、2018と略記）。

隣接する領邦君主家系のサヴォワ家は、中世から近世にかけてフランス王家や王族とたびたび婚姻関係を結び<sup>3)</sup>、双方の宮廷において政治的・文化的交流が行われていた。また、1561年のリヴォリ勅令によって、それまでのラテン語に代わり、アルプスの西（サヴォワ）およびヴァッレ・ダオスタ、プレスにおいてフランス語、領域東部（ピエモンテ）および南部（ニース伯領）においてイタリア語を書記言語に採用したことが示すように、西アルプスから地中海に至るサヴォワ家の支配領域は複数の言語圏を包摂しており<sup>4)</sup>、フランス語の書物の流通圏にも入っていた。こうした背景から、フランス語の狩猟書が同家の蔵書に集積されていったと考えられる。

中世から近世初頭にかけてヨーロッパで成立した写本の中には、写本の所持者の何らかの意図を反映して、複数のジャンルの著作を1冊の書物にまとめたミセラニー写本が数多く存在する。狩猟書のジャンルもその例外ではなく、今日伝わる狩猟書の写本の中には、ミセラニー写本の一部を構成するものがある<sup>5)</sup>。また、同一ジャンルの複数の著作を集成した写本もあり、フランス語の狩猟書の集成本も残されている<sup>6)</sup>。こうした傾向は16世紀の版本に継承され、1567年には、複数の鷹狩りの書を収録した集成本が、ポワティエのマルネフおよびブーシュ兄弟によって刊行された。

トリノ本は、上述の集成本の系譜の中に位置付けることができるが、古版本と写本が1冊に合本されている点が特徴的であり、当時の人びとが、用途によっては写本と版本を区別することなく合本して集成本としたことを示唆している。しかしトリノ本は、たんに写本から版本への移行期にあたる15-16世紀の西欧社会における中世の狩猟書の受容のあり方を示すにとどまらず、その成立過程において、西アルプスからプロヴァンスにかけてのローカルな特徴を示す貴重な史料である。以下、トリノ本の概要を紹介し、その史料的価値について述べたい。

## 1. トリノ本の二つの狩猟書の成立過程

### (1) トリノ本の形態と内容構成

トリノ本は、仔牛革装の冊子体で、サイズは四折版（19×14cm）、二つの狩猟書とそれに続く断篇の支持体はいずれも紙である。史料には、白紙7葉に続き、16世紀前半にリヨンのピエール・ド・サント＝リュシー工房から刊行されたギヨーム・タルディフ『鷹狩り術と猟

3) PITARD, C. dir., *Histoire de la Savoie et de ses états*, Yoran, 2016, p. 282系図参照。

4) *Ibid.*, p. 199. 支配領域の地域言語として、フランコ・プロヴァンス語、オック（プロヴァンス）語、ピエモンテ語、ヴァリス語などが挙げられる。

5) たとえばBNF fr. 25547, ff. 162-199に収録されたアルドゥアン・ド・フォンテーヌ＝グラン『狩猟法典』。

6) Ref. «Manuscrits et traités de chasse français du Moyen Âge» p. 361. 狩猟書の集成本には、別々に制作された複数の写本が後年1冊に合本されたものと、同一の写字生により複数の著作が筆写されたものが存在する。

犬の書』（原題 *Livre de la faulconnerie et des chiens de chasse*. リヨン版の題名は *Livre de faulconnerie et deduyt des chiens de la chasse*）39葉、白紙1葉、アラゴーナ『鷹狩り』（*Fauconnerie*）および鷹の治療法などの断篇を収録した写本40葉（ff. 1–2, 35–39は白紙）が綴じられている。ゴシック・バタルダ体の版本・写本<sup>7)</sup>それぞれに、後年の丁付けが見られる。写本には素朴な筆致の彩色のボーダー装飾（f. 3r）や装飾文字が見られるほか、f. 29rに鳥の焼灼療法図が描かれている。

『鷹狩り』のコロフォンの記述から、本史料は1542年以降に合本されたと考えられる。以下、収録された版本と写本の内容について紹介する。

## (2) ギヨーム・タルディフ『鷹狩り術と獵犬の書』<sup>8)</sup>

### ①トリノ本の版について

ギヨーム・タルディフ『鷹狩り術と獵犬の書』は、1493年1月にパリのアントワーヌ・ヴェラール印刷工房より初版が刊行され、フランス王シャルル8世（1470–1498）に献呈された<sup>9)</sup>。

15世紀後半から16世紀前半のヨーロッパは、写本から版本への移行期にあたり、それまでの媒体が競合・補完し合うかたちで共存していた<sup>10)</sup>。『鷹狩り術と獵犬の書』の場合、初版のヴェラール版よりも後年に成立した写本2点が残されているほか<sup>11)</sup>、判明しているだけでも、1493年から1628年にかけて、複数の版元から版本が15度刊行されている〔資料1, 2〕。

版本は、刊年不詳の版が存在するため正確な系統図を作ることは困難だが、(1)マルネフおよびブーシエ兄弟版（1567年刊。以下、ポワティエ版と略記）より前に刊行された7つの版と、(2)ポワティエ版および、それ以降に刊行された6つの版の二つのグループに分類可能である〔資料2, 3〕。(1)はタルディフの狩猟書のみ収録され、綴りや文章の一部に若干の異同が見られるものの、初版とほぼ内容は同一である。これに対して、(2)は初版の後半部分に

7) トリノ本の版本では、16世紀初めのフランスの版本に見られるゴシック・バタルダ体が用いられている。Ref. BADDELEY, S., «L'orthographe de la première moitié du XVI<sup>e</sup> siècle : variation et changement», *L'Information Grammaticale*, 74, 1997. p. 24–25, 30. 写本の書体は16世紀の«Bastard secretary hand»の特徴を持つ。Ref. BEAUCHESNE, J. de et J. BAILDON, *A Booke containing divers sortes of hands*, Richard Field, 1602.

8) 本稿1(2)は、頼, 2010, 第3章第2節4の未発表部分を大幅に改稿したものである。

9) 当時の暦に従い、初版の奥付の日付は1492年1月5日になっている。以下、本稿では初版と記す。

10) 小川知幸氏が、15世紀後半のドイツの事例を挙げて、このことについて指摘している。「中世後期の手写本制作——15世紀におけるハーゲナウのラウバー工房——」『木這子：東北大学附属図書館報』第31巻第4号, 4–5頁。

11) 写本の成立時期については頼, 2018, 71および73–74頁参照。なお、資料1–6の作成にあたっては、おもに次のサイトおよび文献を参考した。«Les Archives de littérature du Moyen Âge (ARLIMA)», <https://www.arlima.net/> (2020/10/31取得); TARDIF, G., JULIEN, E. éd., *Le livre de l'art de faulconnerie et des chiens de chasse*, Slatkine rep., 1980 (以下 *Le livre de l'art de faulconnerie*と略記); TIÉBAUD, J., *Bibliographie des ouvrages français sur la chasse, Librairie cynégétique*, 1934.

あたる『獵犬の書』が削除され、ジャン・ド・フランシエール『鷹狩りの書』（1458–1469年間成立）やアラゴーナ『鷹狩り』など鷹狩りの書の集成本となっている。内容は、文体が一部修正されている以外はポワティエ版とほぼ同一であり、とりわけ1585年版以降の版では、テクストだけでなく、猛禽類の挿画やレイアウトも踏襲されている。

トリノ本の『鷹狩り術と獵犬の書』は(1)のグループに属し、その中では唯一パリ以外の都市リヨンで刊行された〔資料2-⑥〕。リヨンは、アルプス山脈や南仏プロヴァンスに通じるフランス南東部の交通の要衝であり、15世紀後半から16世紀後半まで、パリに次ぐ印刷業の中心地として繁栄した<sup>12)</sup>。トリノ本の版本の目次部分には、昔の所持者によって各項目に手書きの番号が振られ、対応する本文の見出しに同じ番号が記入されていることから、実際に参照された時期があったと考えられる。

## ②著者について

著者ギヨーム・タルディフ（c1436–c1494）<sup>13)</sup>は、ル＝ピュイ＝アン＝ヴレ出身の平民身分の人文主義者で、1456年にパリ大学で『bachelier ès Arts』の学位を取得した。1460年代後半から学者として一定の知名度を得ており、ナヴァール学寮で修辞学の講義を行っていた。1470年には『基礎文法』を刊行し、1475年もしくは76年に、王太子シャルル（後のシャルル8世）の家庭教師に抜擢された。1483年にシャルルが即位すると、王の侍読に就任した。タルディフは、揺籃期のパリの印刷業と関係が深く、スフレ・ヴェール協同印刷工房で校正係を務めたこと也有<sup>14)</sup>。そのためか、タルディフが王のために著した教育・娯楽目的の著作や翻訳などは、写本ではなく版本が献呈された。狩猟書の著者という観点では、中世後期の狩猟書の著者の多くが実際に狩猟をたしなむ帶剣貴族の生まれである中で、狩猟になじみのない平民出身の人文主義者であるタルディフは、特異な存在である。

12) リヨンは当初神聖ローマ帝国に属していたが、1312年のヴィエンヌ条約によりフランス王国に編入された。リヨンの印刷業については宮下志朗『本の都市リヨン』晶文社、1989年などを参考されたい。

13) G・タルディフの生涯と経歴については以下を参照されたい。ROCHER, Ch. éd., «Les apologetes de Laurent Valla tradisés du latin en françois et suivis des Dits Moraux par Guillaume Tardif du Puy-en-Velay, Professeur au Collège de Navarre, Maistre-liseur du Roy Charles huictiesme de ce nom, Marchessou, 1876, p. 9–53 ; Le livre de l'art de faulconnerie, p.I-XXXII ; CLAUDIN, A., Histoire de l'imprimerie en France au XVe et au XVIe siècle, T. I et II, Nendeln : 1971–1976 ; RUELLE, P., Les «Apologetes» de Guillaume Tardif et les «Facetiae morales» de Laurent Valla, Genève-Paris, 1986 (Textes et études – Domaine français 10, p. 11–15 ; BELTRAN, E., «L'humaniste Guillaume Tardif», Bibliothèque d'Humaniste et Renaissance, travaux et documents, T. XLVIII, n°1, Genève, 1986, p. 7–24 ; TARDIF, G., Les Facetiae de Poge, traduction du Liber facetiarum de Poggio Bracchiolini, éd. par F. DUVAL et S. HERICHE-TRADEAU, Droz, 2003, p. 7–9.

14) CLAUDIN, op.cit., p. 377, 554.

### ③著作の内容について

『鷹狩り術と猟犬の書』は、『鷹狩り術の書』と『猟犬の書』の二つの作品からなり、それぞれ(1)日常的な世話、狩猟の際のさまざまな注意事項、怪我の治療法と処方箋、(2)病気の治療法と処方箋の2部構成となっている。

冒頭は、著者ギヨーム・タルディフからフランス王シャルル8世に宛てた献辞で始まる。

篤信王シャルル8世へ、ル=ピュイ=アン=ヴレ出身で、〔王の〕ひじょうに卑しい侍読、ギヨーム・タルディフが、お引き立てを懇請いたします。〔…〕ひじょうに卑しく、ひじょうに従順な僕たる私は、陛下に私の凡庸な知と才能を捧げました。というのも、貴命により、重要な政務の合間に陛下を楽しませるために、御名においていくつか著作を著したあと、私が見付けた鷹狩りと猟犬の術に役立つあらゆることを、一冊の小冊子の中に書いたからです。その小冊子は、私が以下のラテン語の書物——最初に鷹狩り術を発見し、〔その術を〕書き留めたダンクス王の書、モアムス [=モアミン]、ゲイリヌスとゲイケンナスの書——を仏訳し、かつ、件の術について、ひじょうに詳しく専門的なほかの著者の書物を集めたものです。項目と章によって簡潔かつ明瞭に整理し、あらゆる役に立たない方法や、見付けたり作ったりすることが難しい、あるいは鳥にとって危険だったり、物知りや治療術の専門家に認められていない薬もそのままにしてあります。〔…〕

*Le livre de l'art de faulconnerie, dédicace.* 下線筆者。

タルディフは、自身の身分と経歴を述べた後、王のために執筆した過去の著作・翻訳と『鷹狩り術と猟犬の書』執筆の理由について言及する。そして、執筆にあたって4つのラテン語の狩猟本「ダンクス王のラテン語の書〔…〕、モアムス、ゲイリヌスとゲイケンナスのラテン語の書」<sup>15)</sup>を翻訳すると同時に、ほかの狩猟術の書も参照していることを明らかにしている。

続く『鷹狩り術の書』第1部（全46章）では、鳥類学（第1－9章）、猛禽類（猟鳥）の食餌・衛生管理（第12－30、32、34、43－46章）、そして飼い馴らし方（第10－11、31、33、35－42章）が扱われている。猛禽類は、ワシ、タカ、オオタカの三つに分類され、それぞれの種は、さらにいくつに下位分類されている。ワシ類は«aigle absolument»と«aigle zimiech»、タカ類はチゴハヤブサ、コチョウゲンボウ、ラーナハヤブサ、チュニジアハヤブ

15) 4点の書物は、それぞれ『ダンクス王』、モアミン、ゲイレルムス・ファルコナリウスの狩猟術の書および、ゲイケンナス『飛び道具を用いた狩猟術について』を指す。いずれも東方や、シチリアのノルマン朝およびシュタウフェン朝のフリードリヒ2世の宮廷を起源とする著作である。Ref. *Le livre de l'art de faulconnerie*, p. 2 ; «Manuscrits et traités de chasse français du Moyen Âge», p. 342－343, 348－350, 354－355. これらラテン語の狩猟書は、イタリアを中心に流布していたとみられ、アラゴーナ『鷹狩り』の15世紀の写本で何度も言及されているものの、フランス語の翻訳はほとんど出回っていない。そのためタルディフが王のために翻訳したとみられる。

サ, «faucon gentil», ハヤブサ, ワタリハヤブサ, «faucon montaignier», ワキスジハヤブサ, シロハヤブサ, オオタカ類はメスのオオタカ, «demi autour», オスのオオタカ(«tiercelet»), ハイタカ, «sabech» となっている。著者はチゴハヤブサ以外の鳥の性質について説明し, 外国語での呼び名, 身体的価値, どのような動物の狩猟に適しているかも説明する。続いて, 鷹狩りの専門用語, タカの育て方と飼い馴らし方, 衛生, 食餌, 治療について取り上げられる。

第2部(全53章)では, 鳥の体の15の部位, すなわち頭, 耳, 瞼, 目, 嘴の上部(couronne du bec), 鼻腔, 頸, 口蓋, 舌, 咽喉, 胸体, 体内, 腿(cuyses)および脚(jambes), 足(piés), 足裏の病気の兆候, その原因と治療法が述べられている。

後半の『獵犬の書』第1部は17の項目によって構成され, 犬の理想的な体型, 衛生・食餌管理, 治療, 狩猟のトレーニングについて取り上げられている。もっとも重視されているのは犬の体型の良さと健康維持であり, 狩猟の実践の技法にかんする記述は第1-13章で言及されているのみである。

第2部(全23章)では犬の身体の五つの部位の病気の治療法が説明されている。その説明は『鷹狩り術の書』第2部と比較してきわめて簡潔である。病気の兆候にかんする記述はほとんど無く, 第3章と23章で言及されるのみである。

『獵犬の書』の結語では, ふたたび著者がシャルル8世に語りかけている。

本書の結論。陛下, 私は貴命によってこの著作に取りかかり, あなたの楽しみのために急いで完成させました。[…] あなたの宫廷の貴族や諸侯にどんなに望まれ実践されていようとも, 私はそれ [=狩猟術] を十分に論じた著者を見付けることが出来ませんでした。そして, 書かれていたことは, どうしようもなく, 無秩序で, 書き手の無知や誤りなどによってあまりにも歪曲されていたので, 私はその技 [=狩猟術] の専門家や薬師に確認しなければなりませんでした。[…] あらゆる種類の鳥を捕える実技と獵犬を用いた狩猟の実技は, 以下の題名の三つの書物に記されています。一つはガース, いま一つはモデュスとラティオ, 三つ目はフェビュスです。さて陛下, 私はあなたの高貴なる身体と魂により必要で有用と思われるものを著し, 翻訳し続けるために, 自身の古典と神学の研究に戻ります。[…]

*Ibid.*, La conclusion.

タルディフが挙げている「三つの書物」とは, 14世紀にフランス王や大諸侯の宫廷で成立したガース・ド・ラ・ビュイエニユ『狩猟物語』(1354-1376頃成立), アンリ・ド・フェリエール『モデュス王とラティオ王妃の書』(1377以前成立)およびガストン・フェビュス『狩猟の書』(1387-1391頃成立)<sup>16)</sup>のことである。そして最後に狩猟術の書の執筆に何の意

16) これらの狩猟書の成立と受容については, 賴順子「中世後期~近世初頭における14世紀フランスの狩猟書の受容」『鷹陵史学』第44号, 2018年, 17-31頁参照。

義も見出していないことを明かし、王にもっと有用な著作を捧げるべく古典と神学の研究に戻ると宣言する。

『鷹狩り術と獵犬の書』の序文と結語では、あらたな狩猟書の執筆が、シャルル8世の命で行われたことが強調されている。テクストは、狩猟知のみが簡潔に記されたマニュアルであり、先述の三つの14世紀の著作をはじめ、中・近世の狩猟書の記述の中にしばしば見られる「無為を避けるため」「高貴な人間の務め」といった狩猟行為の正当化や称揚、狩猟にまつわる逸話は見当たらない。しかし、タルディフの狩猟書は、中世後期の狩猟本の中でも屈指のベスト・セラーとなり、16世紀以降、パリやリヨン、ポワティエで版本が刊行されたほか、フランス王家やその傍系のヴァロワ＝アンジュー家に近い南仏の在地有力領主家系の一員、バルタザール・ド・グランドヴェが筆写した写本が残されている<sup>17)</sup>〔資料1-②〕。

## 2. アルトゥルシュ・ド・アラゴーナ『鷹狩り』

### (1) トリノ写本の系譜について

アルトゥルシュ・ド・アラゴーナ『鷹狩り』は、A・スマッツによる先行研究<sup>18)</sup>があるものの、文献学者による校訂はいまだに行われていない。そのため、残された写本や古版本の系統図も確立されていないが、(1)15世紀の3点の写本と(2)16世紀第1四半期に南仏のヴァンサン・フィリポン工房で制作された3点の写本の系統に連なる写本・版本の二つのグループに分類することが可能である〔資料4、5〕。二つのグループの間には、項目の順序や内容に著しい違いがあり、フィリポンが1502年に制作した写本〔資料4-⑤〕のコロフォンで内容の改変を示唆していることから〔資料6〕、フィリポン写本群は異本の可能性が高い<sup>19)</sup>。

トリノ写本は、1542年にカルパントラ出身のジャン・ファーブルによって筆写され、序文の冒頭(f. 3)の記述から、サン=ジュリアン(Monseigneur Saint Julien)という高貴な人物に献呈されたとみられる<sup>20)</sup>。カルパントラは教皇領ヴネサン伯領の首府で、フィリポンが活動していたカマルグの北西約80キロ、また、その出身地アヴィニョンからは15キロの地

17) 以下、マルセイユ写本と略記。詳細については、頼、2018、73-77頁参照。

18) SMETS, A., «Jean de Francières, Artelouche de Alagona et leurs collègues : pour une étude des traités de fauconnerie français du XV<sup>e</sup> siècle», *Mémoire en temps advenir. Hommage à Theo Venckeleer*, éd. A. VANNESTE et als., Peeters (Orbis. Supplementa, 22), 2003, p. 301-312 ; ead., «The Falconry Treatise by Artelouche de Alagona», *Tiere und Fabelwesen im Mittelalter*, éd. S. OBERMAYER, De Gruyter, 2009.

19) 以下、フィリポン写本と略記。15世紀の写本は、フィリポン写本群に見られる鳥類学の項目が欠落しているほか、項目の順番も著しく異なっている。フィリポン写本の系譜に属する版本は、さらに改変されている。詳細は TIÉBAUD, *op.cit.*, p. 45-46および頼順子「15-16世紀フランスにおける狩猟書の受容——アルトゥルシュ・ド・アラゴーナ『鷹狩り』を例に——」『関西大学西洋史論叢』16, 2013年, 39-43頁参照。

20) 写字家のファーブル、写本を献呈されたサン=ジュリアンのいずれも人物は特定されていない。

点に位置している。したがって、ファーブルが写本を制作した場所も、フィリポン写本の流通圏内だったと考えられる。

### (2) 著者について

『鷹狩り』の著者アルトゥル・ド・アラゴーナは、14–15世紀にプロヴァンス伯領を支配したフランスの王族、ヴァロワ＝アンジュー家のルネ1世（1409–1480）に侍従として仕えた南イタリア出身の貴族である。ナポリ（シチリア）王位を主張して南イタリアに遠征したルネ1世が、1442年にアラゴン王アルフォンソ5世に敗れて撤退する際にアラゴーナも一族と共に同行し、プロヴァンス伯領メラルグの領主となった。現存する15世紀の写本〔資料4-①, ④〕冒頭の献辞によれば、著作はルネ1世の最初の妃イザベル・ド・ロレーヌ（c1410–1453）の従弟、ヴォーデモン伯アントワーヌ（c1400–1458）に献呈された。伯の継嗣フェリー・ド・ヴォーデモン（1417–1470）がルネ1世の女婿となったことから、アラゴーナは伯自身とも面識があったとみられる<sup>21)</sup>。

### (3) 著作の内容について

本稿では、トリノ写本について、その底本となったフィリポン写本群も参照しながら紹介する。

フィリポン写本群は、序文とコロフォンを除いた56の項目で構成されている<sup>22)</sup>〔資料6〕。序文の冒頭の記述はフィリポン写本群とトリノ写本で異なっており、後者では著者アラゴーナの情報が完全に削除され、サン＝ジュリアンへの献辞に置き換えられている<sup>23)</sup>〔資料6〕。トリノ写本の序文の訳文は次の通りである。

神とサン＝ジュリアン閣下〔Monseigneur Sainct Julien〕に敬意を表して。ここに、猛禽類についてのあらゆる技を扱う、善き鷹狩りの書を始めます。すなわち、それら〔=猛禽類〕の性質、状態、知識、どのようにそれぞれの場で操られるべきか、そして全般的に、すべての鷹狩り術および、それら〔=猛禽類〕に突然起こり得る身体の不調や病気と、それらの性質に応じた治療法。他の鳥よりも高貴な身であるという理由でオオタカ、オスの

21) SMETS, «The Falconry Treatise by Artelouche de Alagona», p. 56–57.

22) 項目番号はイエール大学所蔵の2点のフィリポン写本〔資料4-⑤, ⑥〕の項目にもとづいて筆者が割り振ったものである。

23) 著者アラゴーナの情報が欠落したためか、トリノ写本はG・トッリーニ（1667）、F・M・マシェ（1713）、F・D・ベンチーニ（1729–1732）によるサヴォワ家の蔵書目録の中で、それと明確に特定できる写本が見当たらず（ただしマシェの目録に記載されている著者不明の鷹狩り書（項目14・No 368）が該当する可能性あり）、19世紀の目録ではファーブルが著者とされているため、サヴォワ家が入手した時期については今後さらなる精査が必要である。トリノ国立文書館のサヴォワ家旧蔵書の目録については以下のサイトを参照されたい。«La Biblioteca Antica | Archivio di stato di Torino», <https://archiviodistatotorino.beniculturali.it/larchivio/la-biblioteca-asto/la-biblioteca-antica/> (2020/10/31取得)。

オオタカ、ハヤブサを、その後に他の鳥を、それぞれの格に従って順番に語ります。

Torino, J.a.IX.4, f. 3r. 下線筆者。

中世の狩猟書では、狩猟の獲物や鷹狩りで用いる猛禽類の序列化がしばしば行われており、もっとも「高貴な」ものから順番に記述された。『鷹狩り』でもそれが踏襲されており、オオタカが最高の評価を得ていることが分かる。

序文に続く最初の8項目は、鳥類学が主題で、オオタカ、ハイタカ、ハヤブサ、『faulcon saphir』、シロハヤブサ、ラナーハヤブサ、ワキスジハヤブサが紹介される。次いで、良い鳥の条件（9）、飼い馴らし方（10–12）、衛生と食餌の管理（13–14）、病気・寄生虫・怪我の症状とその処方箋（15–）と続く。項目38から41では、獵犬の治療法と狂犬や毒蛇の咬傷の治療法が挿入されている。処方箋の項目では、著者がモアミンやダンクス王など、アラブ世界やシチリア起源のラテン語の著作や翻訳を参照していたためか、薬の原料と処方箋の一部がラテン語のまま記載されていることが特徴的である。項目42では、鳥の焼灼療法について図入りで説明が行われている。筆者が参照した3点のフィリポン写本のうち、2点〔資料4-⑤、⑦〕において、鳥の焼灼療法の図版が欠落し、テクストの一部も不明となっているが〔資料6・項目44〕、トリノ写本にはファーブルが書き写した図版が残されており(f. 29r)、数少ない完本となっている<sup>24)</sup>。

また、トリノ写本には、フィリポン写本には無い情報があらたに挿入されている。まず項目41(f. 27r-v)の後に、「私が、貴族のアラン領主ルイ・レノー(Loys Raynaud, seigneur d'Alein)が行っているのを見た」犬の疥癬の処方箋が記されている。貴族から得た狩猟知であると明記した記述は、資料4-②のマルセイユ写本にも見られることから、中世後期から近世初頭の狩猟書の写本が、狩猟を通じた貴族の集合的記憶を記す媒体の役割を担っていたことが分かる<sup>25)</sup>。このほかに、情報源が明らかにされていない狩猟知も挿入されており、項目42の後には、「喘息の止め方について」、「アロエの与え方について」という項目が加筆されている。

トリノ写本のコロフォン(f. 32)には、「私、カルパントラ生まれのジャン・ファーブルが1542年に筆写した本鷹狩りの書、ここに終わる」とだけ記されており、フィリポン写本で言及されていた著者アラゴーナの名は、完全に削除されている〔資料6 [Colophon]〕。

24) 鳥の焼灼療法図については、資料4-⑥に記載したイエール大学所蔵 ms. 667のサイトを参照されたい。この写本はf. 1が欠落しており、フランス国立図書館所蔵 ms. 2005のファクシミリ版が挿入されている。Ref. «YALE UNIVERSITY BEINECKE RARE BOOK AND MANUSCRIPT LIBRARY MEDIEVAL AND RENAISSANCE MANUSCRIPTS, MS 667» <https://orbis.library.yale.edu/vwebv/holdingsInfo?bibId=9616614> (2020/10/31取得)。

25) 賴、2018、76–77頁。

### 3. トリノ写本末尾の断篇について

トリノ写本では、『鷹狩り』のテクストに写字生が持つ狩猟知が挿入されているだけではない。コロフォン (f. 32v) に続く f. 33r–34r の白紙 3 頁にわたり、ファーブルと同一の筆跡で、鷹の食餌療法、潰瘍や寄生虫の治療法、鷹の洗浄法など13項目がフランス語で記されている。各項目はランダムに筆写されているため、寄生虫駆除の異なる処方箋が 2 か所に分かれて記載されている。このような狩猟知の断篇は他の狩猟書の集成本にも見られる。イエール大学所蔵のフィリポン写本、ms. 162 [資料 4 – ⑤] の場合、裏見返しに喘息の治療法がイタリア語で記されており、言語の境界域におけるフランス語の狩猟書の受容のあり方を示唆している<sup>26)</sup>。

#### おわりに

以上、トリノ本の概要を紹介してきた。写本から版本に移行する15世紀から16世紀前半の時期、狩猟知のような実用的な用途の場合、版本と写本の厳密な区別は必ずしも行われず、1 冊の書物に集成することが優先されるケースがあったことが本史料から分かる。写字生は、個人的に得たあらたな狩猟知をテクスト筆写の過程で挿入したり、独立した断篇として書き足したりして、独自の集成本を形成していった。また、それらは仲間と狩猟をたしなむ貴族の集合的記憶を記す媒体の役割も担っていた。

トリノ本のアラゴーナ『鷹狩り』は、資料 4 – ②のマルセイユ写本と共に、異本とみられるフィリポン写本群のグループに属している。このことから、16世紀のプロヴァンスとその周辺地域では、フィリポン写本がアラゴーナの著作として受容・再生産されていた様子が窺える<sup>27)</sup>。そのような写本が、パリではなく、アルプス山脈やプロヴァンスと距離的に近いリヨンで刊行されたフランス王家ゆかりのタルディフの狩猟書と合本され、最終的に隣接地域の支配者であるサヴォワ家の狩猟書のコレクションに加えられた。このことは、アルプス山脈の西端とその周辺地域における、フランス王家と王族の宮廷から発信された狩猟文化の移転の複雑な過程を示唆しているが、詳細は別稿に委ねたい。

#### 【追記】

本研究は JSPS 科研費 JP20H01340 の助成を受けたものです。

26) イエール大学所蔵の ms. 162 の最初の所持者とフィリポン写本の流通については、頼、2013, 40 頁参照。

27) アラゴーナ『鷹狩り』のフィリポン写本群については、その系譜を引くトリノ写本が完本であるため、成立年代がもっとも古いイエール所蔵の ms. 162 [資料 4 – ⑤] を底本とする校訂本の作成が可能であることを最後に指摘しておきたい。

### 【資料1】ギヨーム・タルディフ『鷹狩り術と獵犬の書』写本リスト

- ①グラスゴー, グラスゴー大学図書館, Hunter 269 (U.5.9) 15C 末  
 ②マルセイユ市立図書館, 1009, f. 86–103v, 106–108v, 16C △ ※資料4-②と同一写本

### 【資料2】ギヨーム・タルディフ『鷹狩り術と獵犬の書』版本リスト

#### (1) 16世紀前半

①パリ, ヴェラール, 1492/93

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8626776h.r=Tardif%20Guillaume%20faulconnerie?rk=21459;2>

②パリ, トレプレル, 1506

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k117932x.r=Tardif%20Guillaume%20faulconnerie?rk=64378;0>

③パリ, ヴェラール, 1506/7

④パリ, ル・ノワール, n.d. [c1510]

⑤パリ, トレプレル, n.d. [1527-1532 intr.]

<https://www.bibliotheque-conde.fr/wp-content/uploads/pdf/bibliotheque/bibliotheque-de-chantilly--III-F-111.pdf>

⑥リヨン, サント＝リュシー, n.d.

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k850704h/f1.item.r=Tardif,%20Guillaume,%20faulconnerie>

#### (2) 16世紀後半～17世紀前半

※すべて第1部『鷹狩りの書』のみ収録し, かつアラゴーナ『鷹狩り』を含む集成本

⑦ポワティエ, マルネフ・ブーシュ兄弟, 1567

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k1520426j.r=Jean%20de%20Franchieres%20faulconnerie?rk=42918;4>

⑧パリ, ルマンニエ, 1585

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k850611d.r=Jean%20de%20Franchieres%20faulconnerie?rk=85837;2>

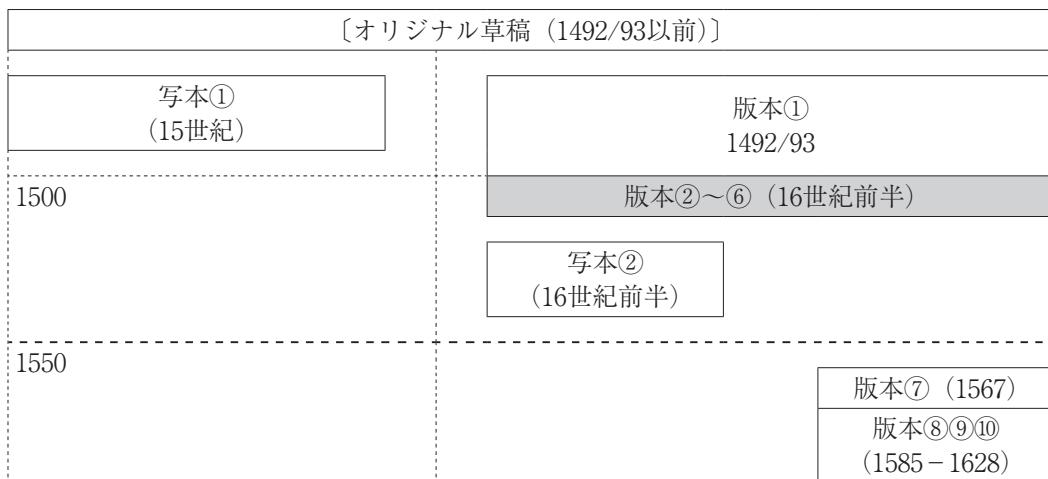
⑨パリ, ランジュリエ, 1602, 1607, 1618

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k82787x.r=Jean%20de%20Franchieres%20faulconnerie?rk=64378;0> [éd. 1618]

⑩パリ, クラモワジ, 1621, 1628

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k1512238d.r=Jean%20de%20Franchieres%20faulconnerie?rk=21459;2> [éd. 1628]

【資料3】テクストの構成に基づく『鷹狩り術と獵犬の書』の写本・版本のグループ



【資料4】『鷹狩り』写本リスト

※版本については資料2(2)⑦～⑩参照。

①ル・マン, ルイ・アラゴン・メディアライブライリー, 79, f. 93r – 116v, 15C △

<https://bvmm.irht.cnrs.fr/consult/consult.php?reproductionId=2910>

②マルセイユ市立図書館, 1009, f. 54 – 82v, 104 – 105v, 121v – 122r? 16C △

※資料1 – ②と同一写本

③マルセイユ, クラピエ・コレクション, 1512 (?) (未確認)

④モンペリエ大学間図書館医学部門, H459, f. 1 – 30 △

⑤イエール大学バイネキ稀観本・手稿図書館, 162, 1502 ●

<https://brbl-dl.library.yale.edu/vufind/Record/3447286>

⑥同667, f. 1r – 50v, 1504 ●

<https://brbl-dl.library.yale.edu/vufind/Record/3446536>

⑦フランス国立図書館, fr. 2005, 1509 ●

⑧フランス国立図書館, fr. 25342, f. 2r – 13v, 15C △

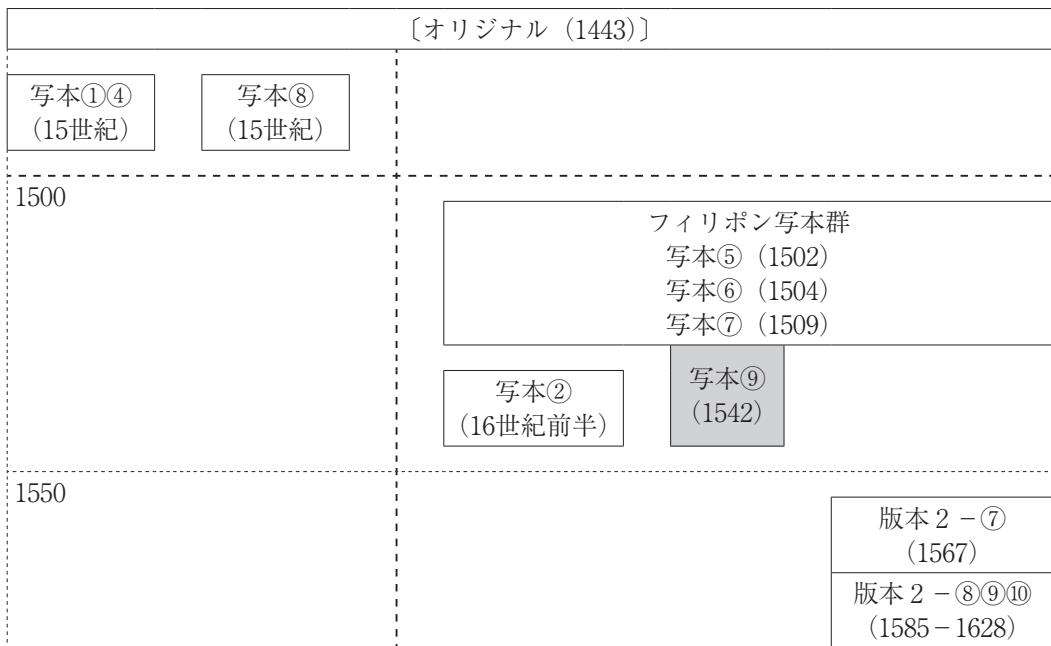
<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b9063703j.r=FRANCAIS%202005?rk=42918;4>

⑨トリノ国立文書館, J.a.IX.4, 1542 △

[●はV・フィリポン制作, △は個人による筆写]

出典: 賴, 2013, 46頁 (一部変更有)。

## 【資料5】テクストの構成に基づく『鷹狩り』の写本・版本のグループ（写本③を除く）



## 【資料6】アルトルシュ・ド・アラゴーナ『獵狩り』フリポン写本およびトリノ写本の構成

※左列の番号はYale Univ. mss. 162, 667の項目にもとづき筆者が割り振った番号。写本に項目の見出しが無い場合は、各項目のテクストの冒頭部分を抽出し、「」で括った。写本の番号は【資料4】に対応。下線はフリポン写本群とトリノ写本のテクストが異なる部分。「——」はテクストに該当部分無し。

項目	⑤ Yale Univ. ms. 162 (1502)	⑥ Yale Univ. ms. 667 (1504)	⑦ BNF fr. 2005 (1509)	⑨ Torino, A. di Stato, JaIX4 (1542)
	[Prologue] «Sensuit ung petit livret fait et compose par Messire Artelouche de Alagonne, seigneur de Meirargues, conseillier et chamberlan du roy de Cecille le quel traite de toutes manieres d'oiseaux de proye. C'est assavoir de leur nature et condicin et congoissance. Et commandant il ce doivent desiner et gouverner chescun en son endroit. Et generallement de toute faulconnerie. Et ausy dez infirmites. Et maladies qui leur peuvent survienir. Et des remedes a l'ancontre celon la qualite d'iceulx. Et premierement des astours, terceroz et esparviers son an condition plus noble des autres dont il parlera cy apres par ordre celon lez degrés de chescuin. [...]»	[Prologue] «[S'] ensuyt ung petit livre fait et compose par Missier Artelouche de Alagonne, seigneur de Meirargues, conseillier et seigneur de Meirargues, conseiller et chamberlain du roy de Cicille, conte de Prouvence lequel traite de toutes manieres d'oiseaux de proye; c'est assavoir de leur nature condicions congoissance et gouvernez chacun en son endroit. Et generallement de toute faulconnerie et aussi des infirmites et maladies qui leur peuvent survienir et des remedes a l'ancontre celon la qualite d'iceulx. Et premierement des austours, terceroz et esparviers son an condition plus noble des autres dont il parlera cy apres par ordre celon lez degrés de chescuin. [...]»	[Prologue] «A l'honneur Dieu et de monseigneur Saint Julian. Cy commence ung beau livre de faulconnerie lequel traite de toutes manieres d'oiseaux de proye. C'est assavoir de leur nature, condition et congoissance et comment il se doyvent governier chascun en son endroit. Et generallement de toute faulconnerie et aussi des infirmites et maladies qui leurs peuvent survienir et des remydes necessaires a l'ancontre celon la qualite d'iceulx. Et premierement des austours, tercoulx et esparviers pour ce qui sont au condicion plus noble que les autres dont il parlera cy apres par ordre celon les degrés de ung chascun. [...]»	[Prologue] «A l'honneur Dieu et de monseigneur Saint Julian. Cy commence ung beau livre de faulconnerie lequel traite de toutes manieres d'oiseaux de proye. C'est assavoir de leur nature, condition et congoissance et comment il se doyvent governier chascun en son endroit. Et generallement de toute faulconnerie et aussi des infirmites et maladies qui leur peuvent survienir et des remydes necessaires a l'ancontre celon la qualite d'iceulx. Et premierement des austours, tercoulx et esparviers pour ce qui sont au condicion plus noble que les autres dont il parlera cy apres par ordre celon les degrés de ung chascun. [...]»
1	«Austour et tersol naist au region [...]»	Des austours	Des austours	Et premierement des austours
2	«L'esparvier naist au bois [...]»	«L'esparvier naist an bois [...]»	Des esparviers	Des esparviers
3	Le pellegrin	Le pellegrin	Le pellerin	Le pelerin
4	Le faulcon saphir	Faulcon saphir	Faulcon saphir	[Le] faulcon saphir

項目	⑤ Yale Univ. ms. 162 (1502)	⑥ Yale Univ. ms. 667 (1504)	⑦ BNF fr. 2005 (1509)	⑨ Torino, A. di Stato, JaIX4 (1542)
5	«Item le gerfault et le faulcon n'a autre difference [...]»	«Item le gerfault n'a autre difference fors que [...]»	Le gerfault	Le gerfault
6	«Item les laniers qui ont la garlante blanche [...]»	Les laniers	Les laniers	Les lasniers
7	«Item celon les saiges, les sacres sont nommés [...]»	«Item cellon les saiges, les sacres sont nommés [...]»	Les sacres	Les sacres
8	«Les faulcons noirs sont tenus por les [...]»	«Les faulcons noirs sont tenus por les [...]»	Les faulcons noirs	«Et faulcons noirs sont tenus pour les [...]»
9	Ls beauté des oyseaux	La Beaulté des oyseaux	La beauté des oyseaux	La beauté des oyseaux
10	Pour fere decimer austours tersols et esparviers sans leur fere force	Pour faire excimer [sic] austours tersolz et esparviers sans leur fare force	Pour deximer austours tersolz et esparvier sens leur faire force	Pour dessimer austours tersols et espriviers sans leur fayre force
11	Pour decimer faulcons et fere	Pour excimer faulcons et faire	Pour deximer faulcons	Pour dessimer faulcons
12	Pour oyseller toutes manieres d'oyseaulx de proye	Pour oyseller toutes manieres d'oyseaulx de proye	Pour oyseller toutes manieres d'oyseaulx de proye	Pour oyseller toutes manieres d'oyseaulx de proye
13	Pour tenir les oyseaux seins et en bon estat	Pour tenir les oyseaulx seyns et en bon estat	Pour tenir les oiseaus seins et en bon estat	Pour tenir les oyseux sains et en bon estat
14	Pour congoistre la sancté universelle de tous oyseaux	Pour congoistre la sainté universelle de tous oyseaulx	Pour cognoistre la sainté universelle de tous oiseaus	Pour cognoistre la santé universelle de tous oyseaulx
15	Les signes des infirmités universellement	Les signes des infirmités universellement	Les signes des infirmintés universellement	Les signes des infirmités universellement
16	Des contenances que tient l'oiseau pour la quelle congoistre lez maladies	Des contenances que tient l'oiseau per la quelle congoistre les maladies	Des contenances et fassons que tient l'oiseau par lesquelles congoistres leurs maladiées [sic]	Des contenances et fassons que tient l'oiseau par lesquelles congoistres les maladies
17	Des essances de la superfluité	Des usances de la superfluité	De aulcunes superfluités qui vient [sic] a l'oiseau	De aulcunes superfluités qui viennent oyseaulx
18	Pour congoistre la sancté et l'infirmité par la cure et par l'esmaul [sic]	Pour congoistre la sancté et l'infirmité par la cure et par l'esmaul [sic]	Pour cognoistre la sancté et l'infirmié par la cure et par l'estmault	Pour cognoistre la santé et l'infirmié par la cure et par l'estmault

項目	⑤ Yale Univ. ms. 162 (1502)	⑥ Yale Univ. ms. 667 (1504)	⑦ BNF fr. 2005 (1509)	⑨ Torino, A. di Stato, Ja.IX.4 (1542)
19	Puis que je vous ay parlé de la nature et [...] «Premierement du catayre dont les signes sont tieulx [...]» La medecine	Puis que vous ay parlé de la nature et [...]. Et premierement du catayre. La medecine	Et Primo Du catarre La medicne	Et premierement du catarre c'est-à-dire reume Premierement du catarre dont les [...] La medecine
20	Les signs d'espillansie La medecine	Les signs de l'espilancie La medecine	Les signs de l'espilencie La medicne	Les de l'espilencie [sic] La medecine
21	De mal de la Bouche	Ed mal de la bouche	Du mal de bouche	Du mal de bouche
22	De l'asme c'est le pantal La medecine	De l'asme c'est pantail La medecine	De l'asme c'est le pantais La medicne	De l'asme c'est le pantaix La medecine
23	De la pierre La medecine	De la pierre La medecine	De la pierre La medicne	De la pierre La medecine
24	Des vers et de fillandres La medecine Pillule contre les vers	Des vers et des fillandres La medecine «Pillule contre les vers [...]»	Des vers et fillandres La medicne que agulles et vers	Des vers et fillandres La medecine Pillure contre vers et fillandres
25	De la pollacre La medecine Ungentum mirabile	De la pollacre La medecine «Ungentum mirabile [...]»	De la poullacre La medicne Unguentum mirabile	De la poudrage La medecine Unguntum mirabile
26	De la goutte des reyns	La goutte des reyns	De la goutte des reyns	De la goutte des reins
27	Des concussions dedans le corps La medecine	Des concussios [sic] dedans le corps La medecine	Des concussions qui sont dedans le corps La medicne	Quant ung oyseau a heu couper qu'il est froisse de dedans le corps La medecine
28	Quant l'oyseau gecte sa viande La medecine	Quant l'oiseau gecte sa viande La medecine	Quant l'oiseau gecte sa viande La medicne	Quant l'oiseau gette sa viande par occasions La medecine
29	Des vantoussites La medecine	Des vantousites La medecine	Des vantoussites La medicne	Des ventoussites La medecine
30	Pour les infirmités du foye La medecine	Pour les infirmités du foye La medecine	Pour les infirmités du foye La medicne	Pour les infirmites su foye La medecine

項目	⑤ Yale Univ. ms. 162 (1502)	⑥ Yale Univ. ms. 667 (1504)	⑦ BNF fr. 2005 (1509)	⑨ Torino, A. di Stato, JaIX4 (1542)
31	De la tingnolle La medecine	La tignolle La medecine	De la tignolle La medicine	De la tignoulhe La medecine
32	De la complecion des faulcons; il se doyvent medeciner	De la complection des faulcons comment il ce doyvent medeciner	De la compleciun des faulcons et comment il le doyvent mediciner	Comment ilz se dolvent medeciner
33	Medecines lassatives et la quantité de douze	Medecines l'assatives	La quantité de donner medicines	La quantité de donner medecines
34	Les chouses courdiallet et lassatives	Les chouses courdialles et confortatives	Les chouses cordialles et confortatives	Les choses cordiales confortatives
35	Des playes Unguentum moult proufitable a toutes playes	Des playes Unguentum moult proufitable a toutes playes	Des playes « Ungentum moult proufitable a tutes playes [...] »	Des playes Unguentum moult proufitable a toutes playes
36	« Item l'oyseau a la fistulle an la teste [...] »	« Item la fistulle des nasalles soit [...] »	Quant l'oiseau a la fistule	Quant l'oyseau a la fistulle
37	« Premierement pour lever une douleur d'une elle ou une jambe. »	« Prencierement pour lever une douleur d'une elle ou de une jambe [...] »	Pour lever une douleur d'une elle ou de une jambe	Pour lever une douleur d'une elle ou d'une jambe
38	« Item ce ung chien avoit mager [sic] pouyon [...] »	« Item ce ung chien avoit mangé poysen, donnes lui [...] »	Se ung chien avoit mangé [sic] poizon	Ce ung chien avoit mangé poizon
39	« Item ce ung chien a vers au une playe soit [...] »	« Item ce ung chien a vers an une playe soit [...] »	Ce ung chien a vers a une playe	Ce ung chien a vers a une playe
40	Pour la moursure de chien anragé	Pour la morsure de ung chien anrage	Pour la morsure de chien anraigé	Pour la morsure d'ung chien enraigé
41	Pour la rongne du chien soyt fet c'est ungant [sic]	Pour la roigne des chiens	Pour la rongne des chiens	Pour la roigne des chiens
42	« Item la moursure du serpent secure au luy donnant [...] »	Pour la morsure du serpent	Pour la morsure du serpent	[f. 27r] Autre receipte pour les chiens que j'ay veu fayre au noble Loys Raynaud seigneur d'Alein pour roigne et charpin
	—	—	—	[f. 27r] Pour la morsure du serpent
	—	—	—	[f. 27r] Pour hoster l'astume de l'oyseau

項目	⑤ Yale Univ. ms. 162 (1502)	⑥ Yale Univ. ms. 667 (1504)	⑦ BNF fr. 2005 (1509)	⑨ Torino, A. di Stato, Ja.IX.4 (1542)
	—	—	—	[f. 27r] Pour donner l'aloés
43	Des cauteres ;	Des cauterres	Des cauterres	Des cauterres
	[f. 32v] Sy voyes la pourtrecture des cauterre sy deant de sines	[f. 44v] Cy voyes la maniere et portrecture des cauterres et fers qui ce donne a l'oiseau	[f. 34v] La pourtrecture de fers pour donner le feu a l'oiseau	[f. 28v] Ci la pourtrecture des fers et cauterres qui se donnent a l'oiseau
	〔落丁〕 (1葉のみ)	〔落丁〕	〔落丁〕	〔落丁〕 [鳥の焼灼療法図]
44	[f. 33r] «des reyns an la foscet qui est celle part. Item le meilleur remede pour une playe parfonde mes que elle soynt [...]»	[f. 45v] «Item le cauterre du millieu de la teste derriere les yeux est [...]»		«Item le cauterre du millieu de la teste derriere les yeux est [...]»
45	Pour ansayeter et adouber les pennages	Pour ansayeter et adouber le pennage	—	Pour ensarter et adouber penraigie
46	Chers usables	Chairs usables	—	Chairs non [sic] usables [sic]
47	Chers restantives	Chairs restraintives	—	Chairs restraintives
48	Chers lassatives	Chairs lassatives	—	Chairs lassatives
49	Chers dessandues [sic]	Chair defandues	—	Chairs dessendues
50	Des chousses qui font avoir feyn	Des chousses qui font avoir fein	—	Des choses qui font avoir fain
51	Pour fere ladicte fleur de lart	Pour faire ladrecte fleur de lart	—	Pour fayre la fleur de lart
52	Des chousses qui font muer	Des chousses qui font muer	—	Des choses qui font muer
53	Pour tenir lubriques	« [...] pour tenir lubriques »	—	Pour tenir oyseaulx en la muée
	Pour fere le lardon	Pour faire le lardon		Pour fayre le lardon
54				[f. 35r] «soyent bien sal pouldres de la poudre de susdict et luy donnees par force et le laisse juner par xii heures et landemain luy presantes l'eau car il an aura mestier.»
55	Pour les pouz	Pour les pouz	Pour les pouz	Pour les pouz

項目	⑤ Yale Univ. ms. 162 (1502)	⑥ Yale Univ. ms. 667 (1504)	⑦ BNF fr. 2005 (1509)	⑨ Torino, A. di Stato, JaIX4 (1542)
56	La fasson de donner toutes cures	La fasson de donner toutes cures	La fasson de donner toutes cures	La fasson de donner toutes cures
	—	—	—	Pillules de gera en octo rebus ce composent en ceste maniere
	[Colophon] «Si finist le present livre de faulconnerie lequel se nomme Artelouche escript et illumine par moy Vincent Philippon l'an de grace mil CCCCCC et quatre.»	[Colophon] «Cy finist le livre [sic] Artelouche lequel a esté escript et illumine par moy Vincent Philippon escript et amplement reduyt l'an de grace mil v et neuf. VRAI LVII SERAI AMI Vincent Philippon CVM ARDORE»	[Colophon] «Ci finist le livre nommé Messier Arthelouche lequel ay esté par moy Vincent Philippon escript et amplement reduyt l'an de grace mil v et neuf. VRAI LVII SERAI AMI Vincent Philippon CVM ARDORE»	[Colophon] «Ci finist le present livre de faulconnerie lequel ay escript moy **** Jehan Fabre natif de Carpentras l'an mil cinq cents quarante deux.»
	[f. 38r] Al Astore che avere l'asima [sic]	—	—	[f. 33r~] Pour ung oyseau qui n'a nulle fain
	—	—	—	Pour oyseau qui a les cresses
	—	—	—	Pour le chancre
	—	—	—	Pour fillandres
	—	—	—	Pour donner le lardon a l'oyseau an sortir de la mue
	—	—	—	Pour l'oyseau qui hurle
	—	—	—	Pour le chancre
	—	—	—	Pour oyseau qui rende sa gorge
	—	—	—	Pour nettoyer ung oyseau
	—	—	—	Pour fillandres
	—	—	—	Quant ung oyseau a mue pour le decimer
	—	—	—	Pour necoyer ung oyseau
	—	—	—	Quand ung oyseau a le fundement serré